

花の咲かない寒い日は

下へ下へと根を伸ばせ

コロナ旋風吹き荒れる中、娘の小学校卒業式が開式された。一時は、開式も危ぶまれた中での卒業式だっただけに、嬉しい気持ちで一杯になった。卒業生にとっては在校生不在の中での卒業式は、ちよつと物足りなさもあった事だろう。いつも通りの学校生活が、急に遮断された子供達にとって、心にポツカリ開いた穴の大きさは計り知れないものがある。そんな中で迎えた卒業式のこと、

「新型コロナウイルスという言葉：何度耳にしたことか：大・キ・ラ・イです。」子供達の悲痛な言葉が響きました。経験したくてもできない経験をする事になった子供達みんな、強い気持ちを養って、元氣いっぱい中学校生活に踏み出して行つてほしい。卒業生のみんな、心からお祝い申し上げます「おめでとう」。

今回の新型コロナウイルス感染拡大によって、世界2600万人の失業者が出ているとのこと。富山県は未だ感染者が認められていませんが、けつして対岸の火事ではありません。いつ何時、中国やイタリアのような状態になるかもしれません。引き続き、予防を徹底していきましょうね。

さて、こういう時は何をしたら良いのでしょうか? 「ピンチはチャンス」という言葉もありますが、では皆様方は、ピ

ンチをチャンスに変える何か工夫をなされていきますでしょうか?ただ漫然と隔離状態の日々を過ごされておられるとしたら、これほど勿体ない時間の過ごし方はないと思います。時間はそのまま、自分の人生の時間であるはずですが、限りある命の時間を漫然と過ごすことは、例えが悪いですが、お金をドブに捨てるようなものだと思えます。

ちなみに私は、「読書」を通して自分の内面を養っています。私自身、年間七百冊ほど本を読みます。本のジャンルは多岐にわたります。あなたは年間何冊くらい本をお読みになりますか?もし仮に、一冊も読んでいないというのであれば、ハッキリ言います。マズいと思います。まずは一冊読んでみましょう。読めば読むほど、あなたの人生が豊かになっていくはずですが、それを実感として感じられるはずですが。幸せを感じる度合いが深くなります。

私は「**食事は体の栄養、読書は心の栄養**」と謳っています。毎日食事を摂って体を養うのに対して、心の栄養も毎日摂る必要があると思います。食事を摂らなければ病気になるように、読書をしなければ自らの品格を磨く事が出来ないと思います。「心身相即(しんしんそうそく)」と言つように、心と体は密接な関係で繋がりが合つています。健康的で豊かな人生の時間を過ごす為にも、ぜひ「読書」をお勧めします。

とは言え、そもそも『仕合せの和』当欄をお読み頂いているあなた様であれば、読書しない部類には入らない方だということになるとは思いますが…(笑)。

●大自然からの恵みと教え

詩人であり随筆家、翻訳家としても知られる田村隆一(1923~1998)氏の『木』という作品をご紹介します。ユツタリとしたお気持ちでお読み下さい。

《木は黙っているから好きだ・木は歩いたり走ったりしないから好きだ・木は愛とか正義とかわめかないから好きだ・ほんとうにそうか・ほんとうにそうなのか・見る人が見たら木は囁いているのだ・ゆつたりと静かな声で・木は歩いているのだ・空に向かって・木は稲妻の如く走っているのだ・地の下へ・木は確かにわめかないが・木は愛そのものだ・それでなかったら小鳥が飛んできて・枝にとまるはずがない・正義そのものだ・それでなかったら地下水を根から吸い上げて・空にかえずはすはずがない・若木・老樹・ひとつとして同じ木がない・ひとつとして同じ星の光の中で・目ざめている木はない・木・僕はきみのことが大好きだ》と。

北海道の白樺はとつても折れやすい性質を持つているそうです。そこで強風でも倒れないように、五、六本がお互いに絡み合うようにして生長します。木同士、健気に意思を通わせているのでしょうか。自然の神秘にはただ驚かされるばかりです。また、樹齢何百年という木のそばに立っていると、無言のままメッセージを発し続ける木の姿は、無限の安堵感と癒しを与える神からの愛を贈り続けていると実感します。

「地下水を根から吸い上げて空にかえず」という木の働きを思いながら、全ては大自然の調和の中に生かされており、その調和力を発揮することこそが正義であるという

考えに至ることでしょう。木が一番高くなつた時の約3倍の長さの土地を与えなると、根が張れなくなるといいます。「木」というと、多く茂つた葉っぱや枝ばかりに目がいきがちですが、表面には見えなくても木をシツカリと支える根という存在があります。人間が豊かな文明を築き上げてきましたが、1人1人は自然の一部に過ぎません。私達は1人の例外なく、目に見えない大きな存在によって生かされているという事を認識する時、人生の真の意味を見出す事ができるものと思えます。全ての人はちよつと5本の指が手の平で繋がっているように、私達の魂もずつと深い所で、皆の魂が一つの根源で繋がっているという真実を表しているのではないかとさえ思います。同じ種類の木といえど、どれ1つとして同じものがないように、私達人間も似たような姿形似たような指向性の人はいても、全てが全く同じという人は1人もおりません。肌の色も考え方も違う人達が、それぞれに天から与えられた役割を果たしながら素晴らしい1つのタ・ペ・ス・トリーを織り上げていくのが人間社会の姿なのだろうと思えます。大らかな気持ちで自然の摂理を受け入れて、その摂理に沿いながら自分という存在を生かしていき。この混沌とした時代の中、人生で幸せになる道を自分自身で選択する知恵を持たなくてはいけないでしょう。人生の難しい選択を迫られた時、さりげない自然の情景や草花、虫達の囁きに耳を傾ける事で、思わぬヒントが得られる事もあるのではないのでしょうか。

●桜と白鳥と私達

「桜は咲いている時だけが『桜』なのでありません。桜の木は、植えてもらった所にじっと立っています。夏は、お日さんがカンカンに照って暑いけど、動かないで太陽に向かって、新しい枝を出したり、幹を太くしたりしています。秋になって葉っぱを散らして、それを養分にします。寒い冬には、その養分を十分に吸うて、暖かい地べたの中で新しい根を作ったり、根を太くしたりするのが桜の355日間の仕事なのです。」桜は自ら綺麗な花を咲かそうと思つてコツコツ準備をしているのです。それでようやく春になり「皆さん見て下さい。1年間頑張ってきましたから、今年もこんなに綺麗に花が咲きましたよ」と、誇らしげに10日間咲くのです。花が散ったら、また来年の準備です。私達は花の咲いている良いところの10日間だけを見て、「桜はいいなあ」と言っていたら、本当の事が見えなくなってしまう。これは人間も同じです。他人の良いところだけを見て、「ああ、あの人はいいなあ」と思うのと一緒です。皆から羨望の眼差しとまでは言いませんけど、人に好かれて格好良く見える人も、それまで黙って他人の見えないところで一生懸命苦労しているということですね。綺麗な花を咲かそうと思つて、じっと辛抱しながら土の中で準備しているのです。1つでもいいから、自分の力で花を咲かすことが大事です。下へ下へと生やした根っこを、腐らない様にするのも大事です。

あるいは白鳥もそうです。池で気持ち

良くスイスイと泳いでいる様に見えますけど、見えない水の下で一生懸命蹠（みずずき）でこいでいます。なんだか楽しそうに遊んでいる様ですけど、白鳥にとつては、今日の餌になる物をキョロキョロと必死になつて探しているんですよ。そばから見ると楽しそうでしょう。人間も同じです。普通の人は、他人の良いところだけが目に付きます。人の見えない苦労が、なかなか分かるものではありません。

そこで私達は、他人の楽な良いところだけ見ていたらいけません。見えないところで頑張っていたり、辛抱していたり、努力している見えない陰の部分が見える自分になりたいものです。努力もしないで勝手に良くなつたり、楽して良くなつたりということは絶対にあり得ないことです。桜の花も白鳥も、自分出来る与えられた努力を一生懸命行っているという一点において、みんな一緒なのです。

仏教の考えでは、自己本位の物の見方を転じて、相手の心と一つになった物の見方をするように教えています。仏教では知識だけで全てを判つたと思つこと、一部分を知つて全てを知つていと主張することを「一枚ざとり」とも言います。諺にも「隣の芝生は青い」・「隣の牡丹餅は大きく見える」などとあるように、他人のものは、何かにつけよく見えてしまいます。「うちの鯛（たい）より隣の鯛（たい）がうまい」とまで言われるくらいです。

誰でも辛い時があります。その時はじつと辛抱する。『花咲かぬ冬の日は下へ下へと根を生やせ』。そしてできるだけ根を生やし、雪の水を沢山吸つてグツと辛抱しましょう。

いつか雪が解けたら、その養分で花を咲かせたら良いのです。根、つまり理念さえ腐らなければ必ず花は咲きます。

「損得・勘定」という自我の「ものさし」を捨てて、「尊徳・感情」という真心の「ものさし」を目指しましょう。

もう一度言います。「何も咲かない寒い日は下へ下へと根を伸ばせ。やがて大きな花が咲く」。下へ下へと根を伸ばし、張り巡らせるタイミングというのはまさに、先行き見えない困難な日々の中にあるのだらうと思えます。

合掌 副住職 谷川寛敬



来月のご案内

◎大黒尊天祭

五月十日(日)

○ご法話

午後一時半

○大黒尊天法味言上

並びに修法祈祷

午後二時半



真ごころちゃん